

7.5 カーンの闇ネットワーク

7.5.1 経緯

2003年以降、イランの原子力活動に対する査察や濃縮の部品を運んでいたリビア行きの船の拿捕により、国際的な核拡散ネットワークの存在が明らかになりつつあった。IAEAは2003年11月にパキスタンから核技術が流出した可能性について警告し、2004年11月、パキスタン政府が2ヶ月間調査に及んだ結果、2人の科学者がイラン及びリビアに機微技術を提供する闇市場にかかわっていたと結論付けた。パキスタン情報当局によれば、A. Q. カーン (Abdul Qadeer Khan) と M. ファルーク (Mohammed Farooq) の両科学者が直接またはペルシャ湾を拠点とする闇市場を通じ、機微技術の提供を手伝っていたという。両氏はカーン研究所でも長い間、同僚であった。ムシャラフ大統領も、一部の科学者が自己利益のためにこうした活動に走った、と認めている。

2004年2月、パキスタンのムシャラフ大統領(当時)が、同国の核開発の父と称されるカーン博士が、イラン、リビア、北朝鮮に主に濃縮技術を供与したとTVで告白した^[27]。

しかし、パキスタン政府が本件に関わっていたのか、明らかになっていない。また、これらの拡散は、欧州やアフリカ、中東、東南アジアなど各地にまたがるネットワークを利用して秘密裏に行われていたとされるが、その全容については明らかになっていない。

7.5.2 カーン博士の略歴^[28]

ボパールに生まれる。ドイツで冶金学を学んだ後、1972年5月から1975年12月までFDO社に就職した。同社は、英独蘭による国際濃縮合併会社URENCO社の下請け業者である。

1974年にインドが核実験を実施したことで、1975年からパキスタンのウラン濃縮計画の責任者となる。1976年、URENCO社の機密、ウラン濃縮に関する情報を持ち出してオランダから出国した。1983年に有罪判決を受けるが、後に無罪となる。

短期間ではあるが、パキスタン原子力委員会に勤務していた。1976年、当時のブット首相は、博士にウラン濃縮プロジェクトの権限を与えた。博士は、1976年7月末、工学研究所を設立し、独自のウラン濃縮技術開発を進めた。同研究所は1981年に名称をカーン研究所に変更した(1998年にパキスタンが最初に核爆発を成功させた際に使った濃縮技術は、このカーン研究所のもの)。

1990年代には、同博士によって核関連技術の売り渡しが行われていると懸念され、以後、国際的な拡散ネットワークの中心にいるのが同博士であることが次第に明らかになっていった。

同博士のキャリアは2001年に3月で幕を閉じる。当時のムシャラフ大統領の命により、研究所所長を解雇された。

その後、「身体の安全」を理由に軟禁されたが、2009年2月にイスラマバード高裁が解放許可の決定を下した。